

人がつなぐ若者の地域移住



新潟県 十日町市

地方創生でうたわれている若者の地域移住。若者は幸せの面で仕事や暮らしに何を求め地域に移住するのだろうか。
成功している地域には、どんな魅力があるのか。地域移住とそれを支える現場に取材した。

東京・渋谷に拠点を構えるETIC (Entrepreneurial Training for Innovative Communities) は、能動的に社会に働きかけ自ら仕事の現場を創出できるような起業型リーダーを支援するNPO法人だ。近年は、全国各地のNPOや企業、自治体、財団、高等教育機関などと連携し、地域の担い手を育てるプラットフォームづくりを行う。

ETICが各地のパートナー団体

っている人、旅で訪れたまちが気に入って、その地域で何かをしてみたいと考える人でしょうか」

地域に移住を希望する人の多くは20〜30歳代だが、主に都会で暮らす彼らが現在の仕事を辞め地方に移住することは、想像以上の一大事。ただやみくもに煽って移住させるだけではうまくいかないで、よく考え一歩一歩慎重に移住を進められるようなプログラムづくりを心がける。

例えばフィールドワークなら全国に用意された8〜10カ所のうちから選んで赴いてもらうが、そこで地方で仕事をするというのはどういう感覚なのか、コミュニティをつくるとはどんなことなのか、自分は本当に東京を離れて暮らせるのかを問い直してもらう。結果、実にフィールドワーク体験者の15%がその後移住を果たしている。実際に地域暮らしを体験した若者たちは、どんなところに幸福感を感じているのか。「自分で育てたものや、知っているあの人がつくってくれた野菜や醤油を食べることで生きている、という強い実感が持てるのが大きい。互いの顔が見える範囲で充実した生活ができることに、非常に価値を感じているようです」と、長谷川さん。

「今は、決まった道を歩いていけば必ずしも幸福が保証される時代ではない。いつでもどこにいてもできるような働き方や、いざとなったら自分の手で日々の

を組織して主催する「日本全国！地域仕掛け人市」は2015年2月に7回目を数え、東京の若手社会人に地域でのチャレンジ機会を紹介するイベントとして状況を呈している。また、仕事を持つ社会人が休暇を使い2泊3日程度で地域活動に参加し、成果をチームで議論・検証し合うフィールドワークや、大学生を一定期間地域に送り込み実地体験を積ませるインターンシップなど、地域移住への足がかりとなる

糧をつくれるような仕事を模索する若者が増えていると感じます」

会社やNPOを立ち上げたり、フリーランスとしてコミュニティ内で発生する小さな仕事を組み合わせて生活したり、農漁業に従事したり。かたちや規模を問わず、小さくても自立した企業や仕事の現場がもつともっと地域に増えればいい、と長谷川さんは願う。「たとえ企業に

雇われていても、起業家精神を持ち続けている」そんな人づくりを目指すETICの取り組みは、ゆつくりとだが確実に社会を動かす若者らの広がりを見守りしているようだ。

生き方を創る

Tokamachi-shi



都会から地方へ移住する時、今度は現地コディネーターの存在が欠かせない。彼らが地元の人との間に入りフォローすることが、移住者らの心の支えになっているのだ。

日野正基さん(33頁)は、そんなコディネーターのひとりで、新潟県長岡市周辺で1年間行うインターンシッ

プログラムを多数用意。これまでに数多くの「卒業生」が多様な業種形態で起業し、地域の企業に就職し、また就農するなどして頼もしく巣立っている。長谷川奈月さんは、これらのプログラムを運営するチャレンジ・コミュニティ・プロジェクト事務局のコーディネーターだ。若者たちは、どんな動機を持って参加しているのだろうか。「今の自分の働き方に疑問を感じている人、地元や地元近くに帰りたいと思

ブ・プログラム」にいがたイナカレッジ」に携わる。運営するのは、もともと2004年10月に発生した新潟県中越地震の復興のためにできた組織「公益社団法人中越防災安全推進機構」。震災から10年が過ぎ、地域が移住者を迎える新しいステージに移ったのだ。

移住希望者と地元のつなぎ手となる日野さん自身は新潟市の出身で、長岡

保存食の切干大根のつくり方を曾根藤一郎さんに教わる佐藤可奈子さん。どんなことでも相談に乗ってくれる頼もしい師匠だ。



若者の社会起業を支援するNPO法人ETICの長谷川奈月さん。地域移住の促進もその一環だ。



曾根藤一郎さん

Sone Toichiro

「毎年気候も違うし、同じものをつくり続けるのは大変だけど、常によりいい米を取獲したい。若い人たちが移住してきて、ここが『奇跡の集落』と言われているのが頼もしいね」

佐藤可奈子さん

Sato Kanako

「豪雪地帯で助け合いが根付いているので、家族のように気にかけて暮らしています。孤立してないからこそ、新しいことに挑戦したり、お金をかけなくても暮らしの安心が得られる。そういう生活に幸せを感じます」

まだ雪の残る田んぼに立つ、右から、曾根藤一郎さん、佐藤可奈子さん、夫の幸治さん。

住でやりがいを感じられる若者たちは、このように、自分でしたい暮らしができる、つまり「生き方を自分で決められる」ことに幸せを感じているのではないかと、日野さんは言う。

体制づくりは基本的に受け入れ側の現地住民に任せるが、地元で行き詰まったりした場合に安心感が得られるよう、インターンの交流の場をつくる。新潟の冬の厳しさに直面するなどして終了前に帰ってしまう人が、年8人のうち1〜3人いるからだ。

それでも移住者は確実に根付いている。十日町市の池谷地区には、わずか6世帯の集落に3世帯が移住。

「子どもも3人生まれ、奇跡の集落」と言われています」と日野さん。初期の移住者が来て限界集落を脱した後も、インターンなどの若者と接することで集落の人に自信が付き、活気が漲っていった。すると今度は若者がそんな集落の人のいきいきとした暮らしぶりを見て幸福を感じ、新たに移住が増えるという理想的な連鎖反応が起きたのだ。

憧れの人の存在

佐藤可奈子さんは、池谷地区へ移住し稲作修業に励む28歳。東京の大学生だった時に中越地震の復興ボランティアとして週末に集落を訪れては、田植えや稲刈りを手伝い、地元の人たちから農業の面白さを教わるうち、今も師

匠として指導を仰ぐ曾根藤一郎さんと出会った。

「曾根さんの農業への向き合い方、その生き方がとにかくよくて感動した」と、佐藤さん。憧れの人がいる場所への思いはつゆり、2011年2月、大学卒業直前に移住。香川県出身の佐藤さんには雪国・新潟の冬は想定以上に厳しく、心が折れそうになった。「でも、夏の後、次の春まで長い秋が続くような香川と違い、四季がはつき

日野正基さん



Hino Masaki

「田舎には役割があつて、必要としてくれる人がたくさんいます。その貢献感が幸せにつながっているのでは」

りしていて、それぞれを楽しめる。魅力の方が大きいと思ひ直しました」
雪は湧き水となって田を潤し、その清水で育ったコシヒカリが、地元誇りの名産だ。米づくりは今年で5回目。最初の3年は土地や機械を無料で借り、去年からは契約書を交わし曾根さんの田んぼを借り耕作している。曾根さんからは一から米づくりを教わったが、未だ失敗ばかりで試行錯誤の連続だ。ほかにも、女性の移住仲間と新たな移

住を促す雑誌を編集したり、農業委員会に参加したり、ファッショナブルな農作業着をつくったりと自立的に暮らしをつくり出し、地域に働きかける活動も行っている。

昨2014年11月に付近の集落の男性と結婚、秋には出産を控える。佐藤さんが考える幸福な地域とは、「自分たちが地域のことを自ら考え、かたちづくっているんだ、という自覚と前向きさがある地域」と言う。ゆえに、

曾根さんのような「70代になっても自分の地域に夢を語れるような人たち」に憧れ、佐藤さん自身も同様にして幸福な地域づくりのバトンを後世に伝えていきたいと願っている。

自立的に暮らしをつくらうとする若者、コーディネーター、地元の人。幸せの面から若者の地域移住を考えると、これらの各人を支援し、ネットワーク化するしくみの重要性が見えてきた。